

IFRS-AC 委員、CMAC 委員の 任期を終えて

公益社団法人日本証券アナリスト協会 参与 かねこ せいいち 金子 誠一

はじめに

昨年末で5年間務めた国際会計基準審議会 (IASB) の IFRS-AC (IFRS 諮問会議) 委員、10年間務めた CMAC (資本市場諮問委員会) 委員を任期満了で退任した。会議はすべてロンドンで行われ、数えてみたら25回出張していた。この間にIFRSをめぐる環境は大きく変貌し、これに伴いIASB自体も大きく変身したように思える。以下では、簡単に両会議の概要を説明した後、筆者の私見によって設定した時代区分に沿ってIASBの変身の様子を示し、最後に10年間の経験に基づく所感を述べたい。

1. 両会議の概要

(1) IFRS-AC (IFRS 諮問会議)

IFRS-ACはIASBに対し、検討事項やその優先順位をアドバイスするための組織である。委員は45名強で、日本からは日本証券アナリスト協会代表に加え、経団連代表 (現在は村岡富美雄 (株) 東芝取締役監査委員会委員長) が委員。他に金融庁がオブザーバー (発言権あり) で参加。IFRS-AC会議は年に3回、ロンドンで2日かけて開催される。2002年の発足

以降、基準諮問会議 (SAC) と呼ばれていたが、2010年4月にIFRS Advisory Councilと名称変更した。本稿では時代区分にかかわらず、IFRS-ACと表記する。

(2) CMAC (資本市場諮問委員会)

IASBと世界のアナリストとの会議。第1回会合は2003年秋。筆者は2004年2月の第2回会議から出席。会議は年3回、通常、IFRS-AC会議の前後にロンドンで1日かけて行われる。日・北南米・欧のアナリスト10名前後、IASBの理事5名前後、スタッフ数名出席。当初はTweedie議長 (当時) の私的アドバイザー会議の色彩が強かったが、IASBの会員向けニュースレター (Insight, July, 2005) で紹介され、2007年6月の会議からは公開 (傍聴可) となっており、公的な性格を強めている。設立以来、アナリスト代表者会議 (ARG) と呼ばれていたが、2011年6月の定款作成と同時にCapital Markets Advisory Committeeと名称変更した。本稿では時代区分にかかわらずCMACと表記する。

2009年以降の両会議の概要報告は日本証券アナリスト協会のホームページ¹に掲載している。また、2011年10月会議以降については、ほぼ同様の内容を本誌に掲載している。

2. IASB の変遷

(1) シンクタンクの余韻時代 2004年～2005年

Tweedie 前 IASB 議長は「2001 年に IASB が発足した時の雰囲気はシンクタンクのようなだったが、その後に EC が 2005 年からの IFRS 採用を決めた (2002 年 7 月に正式決定) ことから現実的な空気に変わった」と述べることもある。しかし、2004 年 2 月に CMAC 会議に初めて出席した筆者には 2000 年代半ばまでは、シンクタンクの雰囲気が色濃くあったように感じられる。ここでシンクタンクの雰囲気というのは、現在の会計基準を改革しようという強い志向が感じられたことを指す。このようなシンクタンク性が生じた背景には、2001 年の IASB 発足に伴い常勤 (一部の人はパートタイム) の有給のメンバー (国際会計基準委員会 (IASC) 時代は基本的に非常勤・無給) となった初代理事達の張り切りすぎ、また主に米国出身の一部の理事達が時価会計原理主義者とも呼ぶべき思想の持ち主だったことが挙げられよう。

CMAC 会議では米国のトップ会計アナリストであった Pat McConnell 氏 (2009 年から IASB 理事) が議長として強い影響力を持って、IASB の改革志向を支持していた。一例を挙げると、2004 年 6 月の会議では、金融商品に関し、McConnell 氏が「将来はすべての金融商品を時価評価すべきと思う人は手を挙げて」と言ったら、筆者と Stephen Cooper 氏 (2007 年から IASB 理事) 以外は全員が挙手をした。筆者は混合属性評価を支持する立場から

反対したが、Cooper 氏が手を挙げなかったのは「すべての資産負債を時価評価せず、金融商品のみを時価評価すると矛盾が生じる」という理由によるものだった。会議後の懇親会で世話役の David Damand 氏に「金融商品の評価に簿価、時価を混在させることは既に決着がついているではないか」と聞いたところ、「CMAC 会議は将来の話をするところだから、あれでいいのだ」と言っていた。帰国後、この話をある会計界の重鎮にしたところ「そんなところで、今でも全面時価の話をしているのですか」と激怒していたことも、今となっては懐かしい思い出である²。

このような IASB の姿勢を当時の CMAC 会議参加者は筆者を除けば概ね支持していたが IFRS-AC 会議では、個別の会計基準を巡って大きな論争があり、日本からの委員 (日立製作所の八木良樹氏と早稲田大学の辻山栄子氏) が、IASB の Jones 副議長に呼ばれて、IASB の姿勢を支持しないのなら出席を見合わせて欲しいと注意される一幕もあったそう³。

この時期のハイライトは、2005 年秋の IFRS-AC 会議、CMAC 会議で CFA 協会 (米国のアナリスト協会) が “A Comprehensive Business Reporting Model” という体系的な会計基準改革ポジション・ペーパーのドラフトを提示したことである (確定版は 2007 年に公表)。これは 60 頁強の大作で、時価評価の徹底、純利益を廃止して包括利益に一本化、直接法によるキャッシュフロー表等を主張する極めて過激なものであった。野心的な大作で全体像を理解するのが難しいこともあって、CMAC

1 <http://www.saa.or.jp/account/index.html>

2 金融商品の全面時価評価について IASB はその後も執念を燃やし、2009 年 2 月の IFRS-AC 会議でも、金融危機後の金融商品のあり方について全面時価評価についての意見チェックを挙手でを行った。このとき、挙手をした 34 名中、全面時価支持は米国のアナリスト 2 名のみで、出席していた IASB 理事には落胆の色がありありとうかがえた。

3 八木良樹・辻山栄子「SAC 委員としての活動を振り返って」季刊会計基準 vol. 24、2009. 3

でも諸手を挙げて賛成という雰囲気ではなかった。CFA 協会の担当者は 300 名ほどの会員のコメントを得てから公表するというので、筆者はアンケートで会員の総意を確認すべきだと主張した。ドラフトの主筆であった Pat McConnell 氏が取り次いでくれて、CFA 協会はアンケートを実施した。ただし、その結果は今日に至るも公表されていない。

このペーパーは一部の先鋭的な IASB 理事の主張との親和性が強かったこともあって⁴、シンクタンク時代の IASB を象徴する一定の重要性を持っていた。ただし、多数のユーザーはペーパーの主張を支持していないことが理解されたこともあり、今日ではこのペーパーの影響力は一部のわが国の識者が懸念するほど大きくないと思う。

(2) 手痛いレッスン時代 2006 年～2008 年

この期間では、純利益を巡る IASB の立場、2008 年の金融危機にあたって IASB が EC の圧力に屈して金融商品の会計基準をデュープロセスを経ずして変更を余儀なくされたことがエポックメイキングな出来事として挙げられる。

前者は 2006 年秋の IASB と米国財務会計基準審議会 (FASB) の合同会議で、将来的には純利益の開示を廃止するという暫定決議を行い、山田辰己 IASB 理事 (当時) を除く全員が賛成したものである。暫定決議とはいえ、さすがにこれは世界中から非難を浴び、約半年後の 2007 年春には純利益を廃止する予定はないという決議を行う屈辱を余儀なくされた。この経験は IASB にとって、現行の会計基準を人々が

基本的に深く支持しているという手痛いレッスンになったのではないかと思う。この話には後日譚があって、2010 年 6 月の IFRS-AC 会議で Tweedie 議長が、IASB は純利益を廃止しようと思ったことは一度もないと発言したので、筆者は上述の経緯を紹介し、少なくとも半年間は純利益を廃止する立場だったはずだと質問した。Cherry 議長は本題からそれる質問として制しようとしたが⁵、Tweedie 議長はそれを抑えて、「あれは大して重要でない文書について簡単な意思確認しただけだ」と釈明、Cherry 議長が「審議の途中経過報告を真面目にやっているのが裏目に出たね」とまとめる一幕があった。会議後の休憩時間に、Tweedie 議長は「純利益については熾烈な闘争 (a huge fight) があった」と筆者に語っていた。会議でのコメント、質問回答、会議後のフォローで発言内容が異なるが、それが可愛らしく感じられるのが前議長の人徳であった。

リーマンショックが生じた 2008 年秋、IASB は EC の圧力に屈し、デュープロセスを省いて金融商品の保有区分変更を認める基準改定を余儀なくされた。この直後の CMAC 会議では、沈痛な面持ちながら全委員が最終的には IASB の方針を支持した。CMAC 会議の直後にロンドンであったアウトリーチも傍聴したが、ロンドン在住の多くの CMAC メンバーが出席し、デュープロセスの欠如に不満を示しつつ最終的には IASB を支持する意見を表明した。この出来事は、IASB にとって最終的に政治の圧力を無視することはできないという苦いレッスンになったと思われる。筆者にとっては、CMAC

4 2007 年の確定版序文には Lisenring 理事への謝辞が明記されている。ペーパーは下記から入手できる。
<http://www.cfapubs.org/doi/pdf/10.2469/ccb.v2007.n6.4818>

5 筆者の委員時代に IFRS-AC 会議の議長を務めた Paul Cherry 氏はカナダの基準設定主体委員長を務めた人だが、議事運営を仕切るのが好きで、特定の立場からの発言が長くなるとしばしば途中で打ち切らせた。筆者も純利益擁護の発言を打ち切られたことがあるし、保険業界のロビイストの発言を止めさせようとして、怒鳴りあいになったこともある。中国の委員の母国語による長口舌 (通訳付き) を止めたときには、「お前は時間を濫用している」と言っており、通訳がどう翻訳したのか他人事ながら心配になった。

委員が苦渋の表情の中で、IASB 支持を明言していたのが印象的だった。これも後から述べるが、意見は言うが最終的には IASB を支持するというのが、多くの委員の共通点である。

(3) 変身期 2009 年～

筆者は 2009 年から、IFRS-AC 委員に就任した。この年に、八木委員や辻山委員を含む第 1 世代の委員は退任し代替わりが生じた。第 2 世代 IFRS-AC メンバーは個人の意見ではなく、所属組織の意見を代弁すること、個別基準ではなく IASB の戦略について発言をすることを叩き込まれたこともあって、穏便な主張をする人が多いと感じられた。また、IASB 自体がシンクタンク時代に比べれば折衷的・実際的になったことが穏便な主張を可能にした面もある。

2009 年以降の変身期における主要イベントは、モニタリングボードの設立（2009 年 4 月）、IASB 発足当初からの理事の退任、Hans Hoogervorst 新 IASB 議長の誕生である。各国の会計基準主体は独立した民間機関という建前になっているが、私見では実質的な上部機関がある。FASB にとっては米国証券取引委員会（SEC）、企業会計基準委員会（ASBJ）にとっては金融庁である。モニタリングボードはフリーな基準設定主体であった IASB に降臨した上部機関である。しかも、そのモニタリングボードの議長である Hoogervorst 氏が IASB の議長に就任したのは筆者には自作自演劇のように見えて、本当にびっくりさせられた。これがすんなりと受け入れられた一助になったのは、Hoogervorst 氏の人柄と思う。何事にも強面な CMAC 委員の英国人アナリストも「Hans に直接会ったことのある人で、悪口を言っている人はいない」と断言していた。

IASB 設立時に任命された理事は、一斉交代を避けるために任期をずらしてあった。2000

年代後半から Mary Barth 氏、Jim Lisenring 氏ら「時価会計原理論者」が退任する一方、2007 年には、Stephen Cooper 氏、2009 年には Pat Finnegan 氏と Pat McConnell 氏が理事に就任し、アナリスト出身者の増員も図られた。McConnell 氏は上述の CFA 協会ペーパーの起草者だが、理事就任後はすっかり大人しくなった。「立場が変わると考えも変わるのか」と質問したら、「責任感が全く異なる」と答えていた。2011 年には設立当初からの理事であった David Tweedie、Warren MaGregor、山田辰己の 3 氏が退任し、IASB は完全に第 2 世代に移行する。昨今、感じられる IASB の変化は、上述した IASB にとってのレッスンと共に、人の交代によってもたらされたものも大きいと思われる。実際に会議で接していても、最近任命された理事は温和な折衷派の印象を持つ人が多い。

IASB の変身振りは、純利益の存続や複数の測定基準を認める概念フレームワークの討議資料を見ても明らかである。わが国関係者の中には、あれは世を忍ぶ仮の姿で油断をしていると元に戻ると疑う人も多いが、筆者は上述した手痛いレッスンと人の交代を考えれば、変身は一過性のものではないと思う。そしてこれは、IASB の変節とネガティブに捉えるのではなく、ナイーブなシンクタンクが責任ある会計基準設定主体に進化したと前向きに捉えるべきだと考える。

人の変化は IFRS-AC と CMAC にも見られる。第 2 世代 IFRS-AC の穏便化については既に触れたが、2009 年以降の IASB は CMAC メンバーの地理的拡大を図り、最近では北欧や南米出身の委員が入り、これが意見の多様化、変化につながっている。スウェーデンの委員が、OCI はすべてリサイクルすべきだと主張したときには、日本だけの主張ではなかったのだと本当に嬉しく思った。10 年前には考えられな

かったが、純利益と少なくとも一部 OCI 項目のリサイクリングは CMAC での多数意見になっている。

3. 10年間を通して感じたこと

(1) 皆が我慢している

10年間の所感をまとめると、「我慢」と「会計基準の世界的統一」がキーワードになる。金融庁の氷見野審議官は雑誌の対談記事の中で、「IFRSは関係者全員の思いどおりになるわけではなく、全員が不満だがぎりぎり我慢できる範囲で何とか折り合って作っていくものです」と述べているが⁶、誠に卓見だと思う。IFRS-AC委員でもある欧州財務報告諮問グループ(EFRAG、ECにIFRSの採用をアドバイスする機関)のFlores議長に、EFRAGはIASBに反対意見ばかり言っているが、どうして最終的にはIFRSをエンドースするのかと質問したことがある。ECが求めるIFRSエンドースメントの閾値(threshold)が低く、現行の基準より改善になればエンドースすべきと定められているから、というのが答えだった。低い閾値を設定したのは会計基準の統一という大義を実現するための欧州の英知ともいえよう。翻って、わが国の一部にはすべて自分の思いどおりにならなければ気がすまないとするような意見もあるのは気になるところである。

(2) 会計基準の世界的統一への熱い思い

このように我慢してもIFRSを受け入れるのは、会計基準の世界的統一を強く支持している

からにはかならない。筆者が出席した最後のIFRS-AC会議となった2013年10月会議でも、このことを思い知らされた。当会議では、金融庁の竹中茉莉子企業開示課課長補佐による日本版IFRSの説明に対し、多くの辛口な質問・意見が出て、この5年間で最も盛り上がったセッションになった。他国の委員にとっては、既に日本基準、米国基準、IFRSが並存する中で、新たな基準を追加することに違和感があったようだ。藤沼IFRS財団トラスティーも出席されていて、村岡委員、筆者を含め日本からの出席者総出で防戦に大わらわになった。最後はIFRS財団のPrada議長、Glauber副議長、Hoogervorst IASB議長らが日本の方針に理解、支持を示すコメントをしてくれてセッションを終えたが、一部の委員には「俺たちはこんなに我慢しているのに日本は何をしているのだろう」という疑問が残ったかもしれない。

今から振り返ると、IFRS-ACやCMACの委員を務める人たちは、会計基準の世界的統一を自明のゴールとしていて、それ自体の是非を議論した記憶がない。統一基準を用いれば、財務諸表の比較可能性は向上するし、これが経済の効率化にもつながることが共通認識であったように思う。一方、わが国の一部には会計基準だけ統一しても、制度や適用が同じにならなければ意味がないという意見もある。一見、もったもだが、よく考えると卵が先か鶏が先かという出口のない議論のようにも思える。Hoogervorst議長の言うように「1つの基準で適用が異なるほうが、複数の基準で同じように適用が異なる場合より、世界的な比較可能性ははるかに向上する」⁷と考えるのが自然だろう。

6 岡田譲治・氷見野良三・森公高・藤沼亜起、「我が国におけるIFRS適用の方向性を探る」会計・監査ジャーナル No. 699, Oct. 2013

7 Hans Hoogervorst, *Are we there yet?*, 5 June 2013, Hong Kong. Available from: <http://www.ifrs.org/The-organisation/Members-of-the-IASB/IASB-speeches/Documents/2013/Hans-Hoogervorst-speech-June-2013.pdf>

わが国では、日本版 IFRS 策定のための作業が着実に進んでいるが、これは日本が最終的に IFRS を採用するために必要なステップとして前向きに捉えたい。また、この作業を1つの契機として、意見は言うが我慢もするという大人の態度で IFRS の採用が進んでいって欲しいと思う。

最後になるが、10年間に渡って様々なサポートをいただいた ASBJ のスタッフに御礼を申し上げたい。ASBJ スタッフの能力は間違いなく世界トップクラスである。今後も、日本基準とともに IFRS の開発にも寄与していただきたいと思う。